

地図を読まない女

人から住所を教えてもらおうと、そこを地図で探したくなる癖がある。などと書くと怪しげだが、自分の断片的な地理情報を、わずかでも繋げたい好奇心からである。開いたページの中に既知の町名を発見した時など、何やら達成感もある。要は遊んでいるだけだが、当の相手にはおそらく気味悪がられるから、やましくはないが、言えない。

一時は、「アルセーヌ・ルパン好き」も相俟って、フランスで購入した全土の地図を繰っては、シリーズに出てくる地名と突き合わせたり、パリに行く度に、ルパンに関係する番地を訪ねては、その写真を撮ったりもしていた。

だから大抵の地図には親しみを覚えるのだが、苦手なものもある。正確には「案内図」で、店舗のパンフレットなどによく使われるタイプのもの。筆描きのような線が何本か縦横に引かれていて、目的地や目印は、線からつかず離れずの位置に黒点で示されていることが多い。察するにそこは道に面しているのかと思いきや、「図上では省略された細い道」を入った先のことだったりする。「地図」だと素朴に信じていると痛い目を見る。たどり着けない。

先日、初めて訪ねてくる友人に、駅からの地図をファクスした。駅前のバス乗り場や、バスを降りてからの目印になる店舗や信号も、細かく描いてある。自慢のようだが（自慢である）この地図で迷った人はそれまでいない。

しかし友人は、「迷った」とぼやきつつ、時間を過ぎて現れた。促して再び外に出てみる。目印の信号を指差し「最初の信号を過ぎたら左に建物が見えたでしょ？」と確認すると、「普通あれは数に入れないわよ」と不満気だ。バス停から信号までの店舗二軒分の距離は、彼女の考えでは「カウントしない」そうだ。ついでに、迷った分の時間も労力もカウントしないのかもしれない。

翻って思うに、地図が「筆描きタイプ」なら彼女は迷わずたどり着けたのではあるまいか。複雑な気分である。「話を聞かない男、地図が読めない女」というタイトルの本があるが、親愛なる「地図を読まない女」は、差し出した麦茶をおいしそうに飲み干した。